

投扇する事良久し終に此業を練磨して圖する所に違ざるにより捨おかんもほゐなくいざや日待の興ともせんかと櫻木にちりばめん事を思ひぬれども今花都の翫専此業有るが故に其書板に顯れたればいかん、玄かはあれども其趣昆雜して易意にわかたし、斯ては即席の興ならじと、東都におゐて秀邦是を撰兒女小童の眼に安からしめんと、予に増減の意味を語り、自投扇庵好之と名乗りて、手練彌極りぬれば、尙又風雅の種を蒔て、予に序文の趣述をこひ、圖畫つまびらかに記せよと、再三の進めによりて、彼れが手練の心ざしを、日陰の紅葉と散さんも心うく、都にまけぬ東の花に彫刻する事にはなりぬ、

安永二みづのとの巳初冬

東都 泉花堂三蝶述

同 投扇庵好之撰之

擲石

擲石ハ投石石拵子等ノ字ヲ用キ、イシナトリ、又ハイシナゴト云フ、石數箇ヲ撒キ、一個ヲ空中ニ擲チ、其未ダ墜チザル間ニ、他ノ石ヲ併セ取リ、以テ輸贏ヲ争フモノナリ、

〔倭名類聚抄四雜藝〕八道行成 内典云、拍毬、擲石○中一切戲笑悉不觀作、

〔伊呂波字類抄伊雜藝〕投石イシナトリ

〔増補下學集下態藝〕投石

〔縣居雜錄〕いしなとり 拾遺集にも、いしなとりのいしに歌かきたる事あり、右の繪に女房二人向ひゐて、一人のての甲へ石ふたつみつのせ、下にも多く散てあり、玄かれば今の童のいふたんまといふ物なり、たんまは玉とりを、小兒の語にてたんまといふなりけり、